

2011年5月8日

東日本大震災第4次アスベスト調査報告

永倉冬史

地震・石綿・マスク支援プロジェクト代表
中皮腫・じん肺・アスベストセンター事務局長

5月3日、4日の2日間にわたって、震災被災地、陸前高田、大船渡、釜石、大槌町の4箇所のアスベスト調査を行った。調査メンバーは、工藤仁美衆議院議員、東京センターの飯田・仲尾、石綿対策全国連絡会議の古谷、アスベストセンターの菅原、永倉の6名。2日の夜に東京センターを出発して、その日は福島市内に宿泊、翌早朝に陸前高田に向かった。

陸前高田に向かう途中、高速道路の一関インターを降りてすぐ近くに結婚式場があり、壁が広範囲に剥がれ落ち、その内側の鉄骨に吹付け材が大量に確認できる。震災で壁が剥がれ落ち鉄骨が露出したもの。その周囲には大きな震災被害は見られなかった。

陸前高田

山間部のいくつかのトンネルをくぐり、まだ桜の花も見える山並みが終わると、谷沿いに津波で押し寄せてきたがれきが見え始め、いっぺんに景色が変わる。海の方角に向かうにつれて、川沿いにがれきがまだ重なっている状態が、車から見える。がれきが端に片付けられた道路を進むと、鉄筋コンクリートや鉄骨造のほとんど柱だけ残った建物、土台ごと丸ごと波の力で押し流され90度に起こされてしまった建物などが所々に見えるほかは、全くの残骸だけ残し跡形も無くなっている。

海に近いホテルの残骸近くに車を止め、徒歩で市街地の状況を見て歩く。海沿いのホテルは、建物は残っているものの内部はまったく破壊された状態。天井の岩綿吸音板、フレキシブルボードなどアスベスト含有建材が確認できた。消防署跡を確認。一階天井はヒル石吹き付けのように見えた。道路わきに片付けられたがれきは、砂（乾燥したヘドロ？）に混じってアスベスト含有建材が破砕された状態で大量に確認できる。サイディングボード類が多かった。

山に近い市街地では、重機によるがれきの撤去、片づけが始まっているが、交通整理をしていた警備会社の労働者と見られる作業員は、マスクの着用をしていない者が見られた。重機操縦者にもマスクをしていない人がいて粉じんマスクの徹底が求められる。

最後に、倒壊した大量の鉄骨に、大量の吹付け材が施工されているものが、がれきの中に発見された。サンプリングと濃度測定を行う。

最後の濃度測定を終わり大船渡に移動しようとしたときに、中学生の 3 人の女の子たちがそこを通りかかった。3 人の話しによると、その中の一人は今だお母さんが見つかっておらず、他の 2 人とともに探しているところだということであった。防じんマスクを 3 人に手渡し、ぜひこれを着けるようにと話した。帰りの車が 3 人に追いついて、みなで手を振って別れるときに、女の子たちは私たちが手渡した防じんマスクをきちんと装着して手を振ってくれた。

大船渡

大船渡では、事前にボランティアセンターへ粉じんマスクを 1000 個提供していたこともあって、ボランティアセンターの石鍋さんが市との会談をセットしてくれた。市役所では副市長はじめ市の災害対策本部の職員が数名、石鍋さんと私たちが粉じん対策についての会談が行われた。副市長から、震災、津波の状況説明があり、私たちからは被災地のアスベスト対策について資料を配り説明した。ボランティア、被災地の住民と特に子どもたちへのアスベスト粉じんへの配慮、マスクの配布と装着についての指導などが重要であると指摘した。

その後、ボランティアの方々が集まっている公園に行き、責任者の千葉さんと顔を合わせ、災害ボランティアネットワークと今後連携をとって行きたいと確認。石鍋さんの案内で、大船渡市街地の津波被害の大きな現場を訪問した。

市街地は、海沿いの魚介類の大きな工場があり、一部の道路はまだ冠水していた。工場の屋根の上には大型トラックが 2 台引っかかっていたり、陸に取り残された船も多く見られた。中心部は鉄骨造の建物が確認され、吹付け材が多く確認された。吹付け鉄骨のあるパチンコ屋は、建物の中にすでに重機が入り込んでおり、すぐにでも解体が始まろうとしていたが、吹付け材の処理は全くされていない状態であった。市街地中心部で献花をし、黙祷をした。

3 日は大船渡から北上市へ戻り宿泊。翌朝早く釜石市へ向かった。

釜石

4 日早朝に北上を出て、釜石市に到着。釜石市では、新日鉄釜石の敷地内に、がれきの山が見られ、がれき類の仮置き場になっている様子であった。市街地の大きな被害を受けた岸壁近くに車を止め、そこから徒歩で市街地を見て歩いた。

岸壁に建造された、大きな倉庫や船に荷積みを行う機械類などは、大きく破壊されているものの、アスベストが使用された様子はあまり見られなかった。

その海際の一帯から少し内陸に入った公共施設に、鉄骨に吹き付け材が見られた。壁の内側や鉄骨の柱や梁に大量に吹かれていた。その建物がある、海に平行した通り沿いに、鉄骨造の建物が多くあり、ほとんどの鉄骨造に吹き付け材が残っていた。サンプリングと濃度測定を行った。

この通り沿いでは、一部倒壊した家屋の撤去作業が始まっていた。撤去が始まっている地区では、自衛隊員が道路の使用を制限し、撤去される建物の住民の方がすぐそばで見守る中、家の中の貴重品の搜索とともに撤去作業が進んでいた。この一帯には吹き付け材を含むアスベスト建材が確認され、散水などの粉じん対策が行われないうちに、自衛隊員と重機操縦者（民間）が作業を行っていたため、粉じんが発生していた。

私たちは、予備に持って来ていた粉じんマスクを急遽住民や自衛隊員に配り、アスベスト粉じんの発生の指摘と、アスベスト粉じん対応のマスクの正しい装着をその場で説明しマスクの装着のお手伝いをした。住民の方、子ども、保護者などほとんどの方がマスクを装着した。

ただ、重機作業者はマスクをしていなかった。また、自衛隊員の中には、きちんとした防じんマスクをしているものもあったが、アスベスト粉じんには対応しないサージカルマスクをして作業をしているもの、マスクはしているが作業中口からあごに引っ掛けて、マスク無しの状態のものがあった。自衛隊員、撤去業者への粉じんマスクの徹底が求められる。

住民へのマスク配布を行っているところへ、市のがれき撤去対策本部の職員とがれき撤去業者の合同調査チームが作業確認にやってきた。私たちは名乗って、アスベスト粉じんの発生の注意、防じんマスクの徹底、住民への防じんマスクの配布等について話をしようとしたが、現場の調査チームは対応できないとし、市のがれき撤去対策本部の連絡先を示した。そこで、市の対策本部へ移動し、がれき撤去係りに現状と防じんマスクの住民への配布を要請した。がれき撤去係りは対策本部へ直接話してもらいたいということで対策本部へ向かったところ、釜石市長が居り、直接市長へ状況の説明とマスクの住民への配布を要請した。

大槌町

釜石を離れ、大槌町に向かった。大槌町に入ると、多くの建物が火災のために黒くすすにまみれていた。町の中心地の庁舎の建物に向かった。町庁舎は津波に遭い町長はじめ多くの町職員が犠牲になっている。庁舎に黙祷をささげ、建物調査を行った。ここでもかろうじて津波に押し流されなかった鉄骨の柱や梁に、吹き付け材が確認された。

まとめ

今回の調査では、吹き付け材、アスベスト含有建材が各被災地で大量に確認できた。現段階での防じん対策は、作業員、自衛隊員、住民ともに十分とはいえない。地域差はあるが撤去作業が始まっており、今後本格化していくと考えられる。そのときの吹き付け材の処理について基本対策が求められる。また、住民側にも粉じん対策を徹底する対策が求められる。